

一 わたしの決意

「縄文時代の大遺跡発見」
じょうもん いせき

小学校六年生のころ、国分市川内かわうちから遺跡※1が発見されたということが、大きく報道された。しかし、わたしはその遺跡には一度も行ったことはなく、自分とはあまり関係のない所だと思っていた。ところが、そのわたしが上野原遺跡うえのはらのガイドをすることになってしまった。なぜなら、わたしが参加している選択教科「社会」の前期の課題が、「上野原遺跡のガイド」であつたからだ。

一学期の間ずっと、みんなはガイドに向けての準備に一生懸命であつた。しかし、わたしは先生からもらった資料を説明用に書き直した程度で、たいた取り組みはしなかった。それは、今回のガイドの方法や内容については、各自に任されていたからだ。他のみんなの取り組み姿を見て、選択教科「社会」が第一希望ではないわたしは、



(みんな無駄な努力をしている。) と思っていた。

いよいよ夏休みになり、わたしたちの上野原遺跡のガイドが始まった。ガイドを終えた友達が笑顔で次々と帰ってくる。順調に進んでいるようだ。自分の番が近づくにつれて、胸の鼓動がしだいに高まり緊張していくのが分かった。そしてついにわたしの出番。受付に現れたのは、夫婦と小学生らしい子供、そして車椅子に乗ったおばあさんの家族だった。これまでは、社員旅行などの団体の方たちだったのに、何か拍子抜けした思いがした。しかも、ここは見学道はできているとはいえ、ただでさえでこぼこな土の道に、砂利を敷きつめた所さえある。(あの車椅子のおばあさんは大丈夫だろうか。) と思いながら、近づくその家族に、わたしは自己紹介をした。「あなたが説明してください。中学生なんです。立派ねえ。」わたしのガイドにとっても期待してくれているようだ。早速、わたしは原稿を見ながら説明を始めた。初めのうちは順調だった。しばらくして、おばあさんに「ここには堅穴住居が全部でいくつぐらいあるんですか。」と尋ねられた。ほとんど勉強していないわたしは、そんな基本的な質問でさえ答えることができなかった。(何で質問なんかするの。どうしよう。) 冷や汗が額を伝わって流れていく。答えにしまったわたしを見かねたのか、「もういいですよ。」と、おばあさんが気を遣ってくれた。それ以降、いくつかされた質問にもわたしはほとんど答えることができず、ただただ原稿を見ながら

説明をしているだけだった。そんなわたしのガイドがつまらないのだろう。退屈した子供は、父親をむりやり引っ張って先の方に進んで行ってしまった。このときのわたしには、ほんの数分が何時間のようにも感じられていた。(説明する遺構※2をいくつかとばしたら早く終わることができ。) そんな考えが脳裏のうりをよぎった。(でもそれでは、これまでわたしのつまらない説明でも真剣に聞いてくれていられるおばあさんたちに申し訳ない。) わたしは二つの思いに揺れていた・・・結局わたしは難しそうな遺構の説明をいくつかとばし、説明の量も半分くらいにして、とにかくこのガイドを早く終わらせることを選んだ。そのとき、

「ガッ ガッ ガチャーン」

見学道の砂利につまづいて車椅子が倒れていた。「大丈夫ですか。」と声をかけながらあわてて車椅子を引き起こした。「大丈夫。心配しないでいいのよ。」痛さをこらえながら、おばあさんはそれを悟さとられないようにそんな言葉を口にした。

わたしは早く終わりたいばかりに、適当なガイドをしたばかりでなく、不安定なおばあさんの車椅子のことなど考



えていなかったのだ。そんな自分が恥ずかしくて仕方なかった。それでもおばあさんと車椅子を押している女性は、わたしの説明を最後まで真剣に聞いてくれたのである。申し訳なく、いたたまれない気持ちだった。最終地に着き別れるとき、おばあさんが「ありがとうございます。ありがとうございました。とっても楽しく見学させていただきましたよ。これでジュースでも買ってくださいな。」と言いながら、わたしに百二十円を手渡した。とても受け取れないと拒こばんでいるわたしに、「母の気持ちですからどうか受け取ってください。」と車椅子を押していた女性の手が、わたしの手を優しく包み込んだ。そのときのおばあさんのしわに包まれた笑みに、わたしはどう答えてよいか分からなかった。何度も振り返り、手を振りながらその家族は帰っていった。

家もとに戻ったわたしは、今日のことから頭から離れなかった。わたしがこれまで真剣に取り組んでいけば、もっとあのおばあさんたちに上野原遺跡の見学を楽しんでもらうことができたはずなのに……。胸しめが締めつけられるような思いだった。（わたしにはガイドをする資格などないのかもしれない。）その日は、なかなか寝つくことができなかった。

次の日から毎日のように学校や市の図書館に出かけたわたしは、家に戻ると机の引き出しにしまい込んだあの百二十円を見つめた。（あの日を忘れてはいけない。）この百二十円は、おばあ

さんとの約束であり、わたしの新たな決意なのだ。

「ここが、今から約九千五百年前の人々が生活していたと考えられる上野原遺跡です。これまで縄文時代は、移住生活をしていたと考えられていましたが、ここ上野原遺跡からは定住の跡が発見されています・・・。」

待ち遠しかった二回目のガイドの日。わたしは思っていた以上に自信をもって見学者の方たちに接している自分に気付いた。「おばあさん。ありがとう。」わたしはポケットの中の三枚のコインをぎゅっと握りしめた。

上野原遺跡

上野原遺跡は、標高250mの国分市上野原台地から発見された。上野原遺跡は約9500年前の縄文時代の遺跡と考えられている。これまで、縄文時代は移住生活が行われていたと考えられていたが、上野原遺跡からは定住の跡が発見されている。その他にも、^{くんせい}燻製などの優れた料理方法が行われていたと考えられる集石などが確認されており、当時は鹿児島が縄文文化の先進地であったことが上野原遺跡の発見により証明されたと考えられている。

※1 遺跡…遺構や遺物が発見された場所のこと。

※2 遺構…昔の人々が地面を掘ったりしてできた生活の跡のこと。（竪穴式住居などがある。）